

学生海外調査研究	
ネパールの小学校学齢期児童の中退の主な原因：児童と教員間コミュニケーションの欠如	
氏名 バズラチャルヤ ディヌ	人間発達科学専攻
期間	2015 年 7 月 31 日～ 2015 年 9 月 20 日
場所	ネパール カトマンズ（首都）とダチンカーリ市
施設	カトマンズとダチンカーリ周辺のストリートチルドレン

内容報告

1. 研究背景と目的

1-1 研究背景

報告者は、ネパールの初等教育の現状を取り上げ、ネパールではなぜ EFA 目標が達成できていないのかその原因を検討する。ネパールに関する国内外のデータによると、ネパールの初等教育への就学率は 97.8%を超えて、UPE の 目標の達成に近いと発表されている。しかし、ネパールにおいては、都市部においても農村地域においても、どこの学校にも就学していない児童と小学校を中退した学齢の児童たちが道路上で物乞いをしていたり、ストリートチルドレンになっていたり、児童労働をしている現状がよく見られる。したがって、これらの子どもたちがなぜ学校へ行けないのか、あるいは学校への就学を継続することができないのかを検討する必要がある。

報告者は、博士課程ではネパールの初等教育における中途退学の要因を中心に研究を行っている。質の高い初等教育は、基礎的な学力を身につける上で重要な役割を果たす。しかしながら、ネパールでは質の高い初等教育を普遍的に与えるという目標を達成してはいない。就学しても授業を受けず中退に至る、これらの子どもたちには特別な配慮が必要になると考え、その子どもたちが学校を中退する様々な要因を検討しそれに適切な対策方法を課題とすることを中心にしている。報告者はこれまでネパールの EFA (MOES 2003)に関するデータを用いて、初等教育の現状と 2014 年中実行した現地調査の結果を元に中退の様々な要因を分析してきた。まず、博士前期課程ではネパールにおける EFA 目標達成の現状と課題 (Bajracharya, 2014)について検討した。その結果、EFA 目標達成には特に農村地に就学前教育の数的な拡充と質的な改善が重要であることが明らかになった。次は、無償教育制度のもとで初等教育へのアクセスの向上が高い比率に見られるが学年が上がるにつれて就学児童数が減少する傾向が全ての学年に見られている。それが継続している実態が明らかになり、そのサステナビリティの問題を確認できた。また、ネパールの多くの農村地域では「量的な増加と同時に質的な低下」の問題が顕在化していることが明らかになった。最後に、小学校低学年にはほとんど就学の男女格差は存在しなかったが、子どもの年齢が上がるにつれ様々な要因によりジェンダー格差が生じている。ここからの課題は、社会・経済的な側面と同時に、教育に関する制度も改革する必要があること、特に、初等教育への予算の配分政策（実在する在学者数によって資金提供する政策）、幼稚園・学校の登録制度の改革、無償教育制度を全ての学校に忠実に実行させるような政策、教員免許制度の導入と縁故により教員になるシステムを終息させるようなルール の設立、ジェンダーによる教育格差を撲滅するため、地域格差を緩和できるような政策の実施が必要である。つまり、初等教育に関連するこのような分野への政策の変革が、ネパールの EFA の目標を達成には重要だと考えられる。また、教育に関する知識不足の解消、伝統的な考え方の変革もネパールの EFA の目標を達成するため、教育の効率性を改善していくためには非常に重要であると考ええる。

博士後期課程 2 年次ではネパールの公立小学校において中途退学に影響する要因について検討し、多様な要因のうち教員と児童の間のコミュニケーションの不足も一つの中途退学の要因であることを

明らかにした。さらに、教員と児童とのコミュニケーションが中途退学にどのように影響を与えているかそれも明らかにした。2014年9月~10月の間に行った現地調査（カブレパランチョク市、小学校2校）から、多くの公立学校における中途退学は社会・経済的な要因以外、学内に毎日実施している①ワンウェイ・コミュニケーションの学習パターン、②カリキュラム中心の学習方法、③教員の評価、④体罰と怒りと⑤両親によって形成されてしまった教員の怖いイメージ、などが教員と児童とのコミュニケーションの機会を減少させている実態が明らかになり、これは「学校をやめたい」という気持ちを生じさせ、結果的に中途退学するような悪循環になっていることが明らかになった。ここで注目したい点は、この調査は現在在学中児童のアンケート調査と教員によるインタビュー調査の元で明らかになった結果である。

Blount, T. (2012) と Rumberger (2001) によると、性別や学年を問わず、児童・生徒・学生の中退退学は教員と勉強に関する話と同時に様々な内容に関するコミュニケーションする・しないことから影響をしていることを述べている。しかし、ネパールのような途上国の公立学校にも、このファクターが影響するかどうかについての深い研究がされていない。これまで指摘されている中途退学の学内要因では、教育投資、質、インフラ問題などに限られている。実際に中退しているネパール人の子どもも同様な要因のみの影響で中退したのであるか、または、以上に述べた①から⑤状況によって教員とのコミュニケーションできなかった点も中退の要因であるかないかを確認する必要があると考えた。

1-2 海外調査の目的と調査方法

そこで、本研究の目的はネパールの特に農村地の児童はなぜ学校の卒業まで至ることができないのか、その理由を明らかにすることである。つまり、1) 中退者を生む傾向のある主な理由、2) 教師と児童間のコミュニケーションに影響する要因、を検討することが本研究の目的である。

本研究の調査対象地としてネパールの首都カトマンズとカトマンズから35km離れたダッチンカーリ市に決定した。これらの地域を選んだ理由は、①ネパール全国からの中退児童は多様な目的・夢を持ちカトマンズに入ってくるため、②都市部とも農村部ともどちらとも言えないダッチンカーリ市は開発が遅れている地域で、中退問題が深刻であるため、である。NGOのHeart Beat, SathSathの協力を得て、小学中退児童と小学を中退経験のある児童（21名）にFocus Group Discussion (FGD)でインタビュー調査を実施した。次に、FGDによって、コミュニケーションの欠如の影響により中退者のみ(11名)のcase studyを実行した。2014年度中、中退リスクの高い在学中の児童たちに実施した調査のもとで、教員と児童の間のコミュニケーション（話題を問わず）が中退率に影響することが明らかになった。それにもっと深い根拠を明らかにするために、今回は実際の中退者（年齢を問わず）に中退の多様な要因に教員とのコミュニケーション欠如・不足の影響があったかを検討した。

2. 調査とデータの概要

2-1 調査の概要

本調査では小学中退児童と中退経験のある児童（ストリートチルドレン）の約50人を調査対象とすることを目的としていた。しかし、2015年4月21日のネパール震災の影響で多くのストリートチルドレンが死亡、行方不明になってしまったので、21名の人数に絞らざるを得なかった。カトマンズ到着後、まずHeart Beat NGO の理事と打ち合わせをし、彼から、子どもとまず仲良くした方がより深い話をできると教えてくれたので、最初の一週間（4回）子どもと話をしたり、一緒に遊んだり、パソコンのゲームなどをよくしていた。この一週間の間、報告者が子どもと話してからストリートチルドレンにおけるイメージが変わった。一人ひとりとはそれなりの問題、悩み、不満などが持っていることが理解できた。ストリートチルドレンになりたいからなっている子どもより、それ以外の選択肢がないから道路上に住まざるをえなかったケースが多くあった。

FGDインタビューの中退者の年齢は8歳から18歳までであり、そのうち、20人は小学を中退し、一人は中学(6年)で中退した子どもだった。全ての対象者は男子で、全ては道路上に生活するストリー

トチルドレンである。SathSath NGO（ストリートチルドレンと関わっているネパール団体）のデータによるとストリートチルドレンの9割以上は中退者であることを確認でき、今回はストリートチルドレンを調査対象者にした。

対象者の21人のうち、3人は兄弟で親も道路上に生活している。それ以外他の5人の対象者の親がそれぞれの実家にいることが分かった。最も驚いたのは、対象者のうち一人は政治家の孫であり、非常に裕福な家族の子どもだったが、デンドライト¹を吸う癖がつき、ストリートチルドレンになってしまったという実態である。

驚いたことに、ストリートチルドレンにも階級があり、先輩と後輩のシステムがある。先輩から後輩に命令を出し、後輩の行動をすべて決めている。そのため、本FGDインタビュー調査に参加したくても、先輩から禁止されているので、参加せずに、帰った帰られた子どもが6人居た。このような環境で、21人を5つのグループに分け、そのうちの11人に個人インタビューを実施した。本研究の目的は、学校を中退した原因と、様々な中退要因のうち教員と子どもとのコミュニケーションの欠如のような要因も機能しているかを検討して見ることであるため、また、前年に実行した調査結果と比較するため、本調査を依頼し、調査を実施することをした。

質問紙調査の内容は、1) Opening Questions として、年齢と様々なNGOに通っている年数について聞き、2) Introductory Questions と3) Transitional Questions の項目に、学歴、学校と教員について（イメージと好・嫌）について、4) Key Questions として、中退の要因、教員との関係、教員とコミュニケーションする回数、内容と再入学したい・したくないについてじっくり話、最後に5) Ending Questionsに子どもたちの原状について感想と過去に通った学校で何を変えるべきかについて意見をまとめた。英語を通じると通じない子どもがいたので、全てのFGDインタビュー調査と個人インタビューはネパール語で実施した。各グループのFGDの時間は約130分程度かかってしまった。ネパール語が完全に通じない子どももいたので、それを簡単なネパール語で一つ一つの言葉を丁寧に説明しながらインタビューを実施した。個人インタビューには約40分程度の時間を掛けてインタビュー調査を行った。

中退者以外に、ストリートチルドレンの面倒を見ているHeart Beat NGOとSathSath NGOの理事とのインタビュー調査、中退者を再入学できる学校（個人学校）の学長とのインタビュー、更に、もとはストリートチルドレンのため活動した経験者とのインタビュー（現在道路上の犬のため活動する）合計4人、それぞれの目的で活動している方々とインタビュー調査を実行し、中退に関する深い要因とその実態について“Triangulation 調査方法”で結果を検討・分析してみた。

※「文章中のインタビュー回答者の名前はすべて仮名である。」

2-2 データの概要

2-2-1 FGDインタビュー調査から

FGD インタビューの主な質問に対する回答は以下の通りである。

「学校と言ったら一番初めに思い浮かぶことは何ですか」については、教員の体罰と答えた子どもが最も多かった。それ以外、勉強をした日々、通学の辛さ、好きな先生、遊び、友だちとの喧嘩、先生、学校のスタッフ、友人からの虐め、宿題、トイレに閉じ込めたこと、昼ごはん、子どもの時期、

¹ デンドライト：普通の接着剤である。しかし、それをビニルに入れて空気を入れて吸うとドラッグのようになるようである。接着剤であるため、すぐに、安くどこでも購入できる。ネパールでは最近このデンドライトを吸う子どもの問題は社会問題になっている。日本のシンナーと近いようである。

カストによる差別などのような回答があった。ある子が親の死亡や妹の死のような悲しい回答もあった。学校の先生のイメージに関する質問にも、全員（一人を除く）の回答はネガティブであった。残りの一人の子どもが「あの先生（女性）はすき。いつも私のために親と喧嘩してくれる。いつかその先生に会いに行きたい」という意外と先生と仲良い子どもの回答だった。

「学校をやめた理由・原因についての問に対しては、中退の要因一つだけに限った中退者がいなかった。つまり、それぞれの子どもは長時期に渡り、複数の要因が重なり、最終的に中途退学するような決断をしたということが明らかになった。つまり、中退する判断はすぐに決めたものではなく、多様な要因の影響で、ある限界に達したら、中退したという重要な点が明らかになった。ここから、言えるのは、各児童・子どもは中退する前に、中退リスクのある段階を通じて中退に至る（Bajracharya, 2015）ということと共通する。中退の主な原因は、授業が楽しくない、勉強が難しくてしたくない、眠くなる、授業を理解できない、体罰、怒り、トイレに綴じ込まれること、同級生・先輩・教員とスタッフからのいじめとパワーハラスメント、両親の死亡、父の死亡、や父の酒癖、母や父の再婚、家庭内暴力、英語と数学が苦手（弱い）、中退者の友人に教えた、宿題嫌い、友人と話が合わない、喧嘩になる、姉や兄が中退したから、長時間黙って座るのが嫌い、座れない、新入生だから学内外に先輩からのいじめ、自分の性格がよくない（すぐに切れてしまう）、家族の恐怖、自由好き、無駄遣い、デンドライトの癖、夏・冬休み中、児童労働、4月の地震、などであった。

「先生とのコミュニケーションに関する質問」には、すべての子どもは学校の先生から多様な形で体罰を受けた経験があるものだった。体罰と言ったら、肉体的な体罰以外、トイレの中一日中閉じ込めること、腹筋させる、ベンチ上に一日中立たせる、体質させる、罰金を払わせる、一日中走らせるなどを経験した子どもであった。教員についてもっと具体的に話すと、各子どもが好きと嫌いな先生がいて、女性の先生がより優しかったという。対象者 21 人のうち、先生と勉強と勉強以外の様な話題に関してコミュニケーションをしたことがある子は4人しかいなく、少しはするという子ども3人、14人は全くコミュニケーションを取らないということを明らかになった。先生とコミュニケーションを取らない理由は概ね、授業中先生と話す機会がほとんどなく、教室外でも話すのが怖いという原因でした。また、女性の先生と話すのが恥ずかしいことも一つも理由であった。では、追加で、どんな時先生と話すのかという質問には、「わからない事務的な手続きをしざるを得ないときだけ、怖がりながら先生に教えてもらっている。つまり先生に話をかけている」という声だった（スベディ、18）。それ以外は、「先生に授業中何か聞かれたら返事をする。間違えると、恥ずかしいし、また怒られるのではないかと思います、できるだけ、先生の目に合わないようにする」というふうに答えてくれた（ヘムさん、11）。

「学校をやめる前に学校へ行くのが好きでしたか」という問に好きと答えた子どもは7人で、嫌いだったと答えた子ども13人、わからないと答えた子ども一人いた。嫌いだった子どもが、学校に向かっている途中で、こどもと遊びに行った日々が多かった。また、ビノドさん（14）が「学校へ通ってない・中退者の友人に遊びようと誘われたら断れない」という。

そして、「今から学校へ行く機会があれば学校に行きたいですか」の質問には3人以外の子ども全ては学校に行きたくないという答えだった。自分の現実を最も理解しているようで、ラム（ムチャル13）さんは、「今毎日住む場所と3食が安定していないので、学校に行けないのは決まっているでしょう」と逆に質問された。また、ヘムさん（13）が、「僕はここ（パスパチーナト）が一番好きです。人が死んだら、嬉しく感じます。なぜなら、食べ物とお金がたくさん取れる。たまには、死体を燃やしたあと、その粉から銀もとれることがある。そのような日、肉とご飯を買えられる。デンドライトも吸える。なので、現在は学校に行くより自由に生活を過ごしているよ」と答えた。

一方で、「学校ではあるいは先生の何を変えれば、再度学校に行きたいと思いますか」という質問には、多くの子どもは、学校では毎日楽しいことを教えてくれば（19）、遊びながら勉強できれば（16）、いい友人がいれば（14）、パソコン・ゲーム（20）、テレビを見せる学校（13）、先生が優しくしてくれば（13）、何か間違えても先生が優しくしてくれる学校（9）、優しくていい扱いをする学校（6）、宿題少ないなら（5）、サッカーゲーム（4）、喧嘩してもトイレに綴じ込むようにバツをなければ（3）、プールあれば（2）、父親の身元を確認できなくても行ける学校であれば（1）という様々な希望が明らかになった。ニレ（16）は先生の性格が良ければ、学生の性格も良くなる。僕の先生はすぐに切れるタイプだったので、僕もそれを見習った。

「学校を中退の主な原因は学校、先生、自分、家族の内誰だと思いますか（1, 2, 3, 4 に並べ）」という質問には、最も主な原因は家族（17 人）その主な理由は経済要因、親の怒り、親の再婚など、2 番目は学校の先生で 3 番目は自分といった子ども一人であった。

「中退の決断は正しかったと思いますか、将来何なりたいですか」という質問に対する回答は、3 分の 1 の対象者は今の状態で満足していた、将来なにもなりたいたいのがない、や将来のことを考えていないという（6）。他は機会があれば学校行きたい（3）、テンプドライバになりたい（2）、コックになりたい（1）、仕事をできる用な訓練を受けたい（4）、農業やりたい（1）、ビデオゲームセンターをやりたい（1）、道路に小さいお店をやりたい（1）、大きいギャングスターになりたい（2）という。このなかで、身分証明書さえあれば、仕事の訓練を受けて、稼ぎをするために海外（アラブ、サウジアラビア、マレーシア、など）へ行きたいという。しかし、親自身の身分証がない場合、あるいは親の身元を確認できない子どもはなんの訓練も受けられない。そのため、お金を必要な時、インドまで行きたくさん働くのが一般的である。全員の対象者はインドに行ったことがあり、スベディ（18）は「僕ら現在、勉強よりも金になる用な訓練がある」と要求する。さらに、今サントスさんが（18）「今だと学校に行きたい。学校を中退して後悔している。今、年齢が合わなくても最初から勉強をやり直したい」という。

2-2-2 様々な NGO 関係者へのインタビュー調査

インタビュー調査を行った NGO（SathSath）の理事は、子どもに中退をさせないため、まず自分「大人」が子どもになる必要があるという。また、カトマンズにいる多くのストリートチルドレンは親から捨てられた子ども、児童労働に行かされた子が多い。そのうち、在学中の子どもがストリートチルドレンや働いている子どもと仲良くした結果、中退するケースもある。また、ある子どもたちは学校を続けるということは家にいながら家庭的な仕事（無給）しなければならないため、学校さえやめれば、より高いお金を稼げる仕事ができるというような考え方が一般的である。ストリートチルドレンは教育を受けて将来のことを考えるのではなく、お金を得て（マールを探して）今日、現在のことを考える。つまり、一日の食事と一本のデンドライトさえあれば、何もいらぬという。少し、大人になったら、教育を受けておけばよかったのというような後悔するストリートチルドレンも居て、そのような中退者には教育と仕事のトレーニングなどをあげ、毎日 200～500 ルピーを稼げるようになっている。女性のストリートチルドレンについて聞いたところ、女性もストリートチルドレンもたくさんいるが、簡単に外にでない。また、ネパールの多くの女子はインドに売られるケースが多いので、一度学校と家族から離れたら、その女子は簡単に学校や家族から受け入れてもらえない社会的な考えもあるから、子どもに中退してから再教育を提供するより、中退させないような対策方法がより効果的で重要であると述べた。

3. 今後の課題と予定

今後は本海外調査で得られたデータを整理し、中途退学に「コミュニケーションの欠如」がどの程度影響しているのかを分析を行う。同時に、中退者の上昇を抑えるための方策を検討する。分析の結果は、2015年11月にアメリカ（LA）に開催される2015Fall Global Conference on Education, University of River land の学会に口頭発表をする予定である。発表のコメントによる修正後、American Journal への投稿を予定している。なお、報告者の博士論文の一部として、中退要因として「教師と児童のコミュニケーションの欠如」とそれに関係しているファクターについて検討する予定をしている。つまり、本研究は報告者の博士論文の重要な一部として位置付けられている。

4. 謝辞

本海外調査に対し、平成 27 年度「女性リーダーを創出する国際拠点の形成」プロジェクト「学生派遣」プログラムのご支援をいただいたことに心より感謝を申し上げます。また、ネパール、カトマンズ都、ダチンカーリ市での調査を実施するにあたり、SathSath (NGO) の Biso Bajrachrya はじめ

Heart Beat (NGO) のJujukaji Maharjan、リサーチ・アシストしてくださったJiwak Bajracharya, Salauna Bajracharya の皆様からご協力、ご助言をいただいた。皆様に 感謝の意を表したい。そして、本調査のために、時間を割いてくださったストリートチルドレンの皆様にも心よりお礼を申したい。

5. 参考文献

Blount, T. (2012). Dropout Prevention: Recommendations for School Counselors. *Journal of School Counseling, 10*(16), 1-16.

Bajracharya, Dinu. (2014) 「ネパールにおけるEFA目標達成の現状と課題」『人間文化創成科学論叢』お茶の水女子大学人間文化創成科学研究科、第17巻、191-199頁。

Bajracharya, Dinu. (2015). Impact of Teacher-Student Communication on “High-Risk Dropout” Students. *Developing Countries Studies, V.5* (18), pp. 88-100.

<http://iiste.org/Journals/index.php/DCS/article/view/25483>

MOES (2003) *Ministry of Education and sports, Education for All, National Plan of Action Nepal (2001-2015)*, Nepal National commission for UNESCO, MOES, Nepal.

Rumberger, R. W. (2001). Who drops out of school and why. *Understanding Dropouts: Statistics, Strategies, and High-Stakes Testing. Washington.*

指導教員によるコメント

ディヌさんは、これまで、一貫してネパールの初等教育における中途退学の問題を研究してきました。初等教育における中途退学の問題は、現在の国際教育開発において最も注目されているテーマの一つです。1990年にタイのジョムティエンで開催された「万人のための教育世界会議」以降、国際社会は初等教育の普及に力を注いできました。その結果、就学率は多くの国で上昇しましたが、小学校中途退学の問題は多くの国で依然として残された課題となっています。中途退学の原因としてはこれまでは貧困や児童労働など、主に経済的な要因があげられてきましたが、ディヌさんの今回の調査研究は、教師と児童間のコミュニケーションに着目するもので、教室内の教育過程の重要性を示唆しています。これは、途上国における小学校中退に関する研究に新たな知見をもたらすものと評価できます。（基幹研究院・人間科学系・教授 浜野 隆）

Effecting factor for dropout in Nepalese public primary school: Lack of Children-Teacher Communication

Bajracharya Dinu

The main purpose of this study was to investigate the major reasons for dropout in Nepalese public primary school and then, further investigate the impact of teacher-student communication on “School dropout”. To account this, where empirical literature review was done. Then, Focus Group Discussion (FGD) and series of interviews had been performed. FGD survey had been done with 21 school dropout children who are currently living as a street children (age 7-18) and “Series of an interview with the NGO workers, (who were related to street children) had been done to found most crucial factor for dropout. Entire FGD questionnaires and interview protocols had been developed based on the empirical literature review and, then peer-reviewed by the experts and colleagues.

The findings of this study shows that, impact of teacher- student communication effects on children’s decision of dropout. Besides that, the study found the correlation between the dropout and negative friends circle, which lead students toward the “dropout” in Nepalese context. Based on these findings, this paper suggests some instructional strategies that might increase the “teacher-student communication” and decrease the dropout rate. Inquiry-based learning (IBL), teacher-student informal communication, learners centered approach, and integration of technology in education are some of them. Lastly, the study finds the depth study regarding children’s behavior with eahcother is needed.